

〈事例報告8〉「擬古文を書いて論理的思考を深化しよう」(国語総合)

1 はじめに

高等学校学習指導要領では、国語科の目標は次のように記されている。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

国語には「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域があるが、授業は読解が多くなりがちである。もちろん「読む能力」を伸ばすことで、他の「話す能力・聞く能力」「書く能力」も向上する相乗効果は見込まれる。しかし生徒の現状に鑑みると、論理的に思考し、自らの感情を表現し、一貫性のある主張を文章に書くことは苦手であるように思われる。

そこで、表裏の関係とも言える「読む能力」を活用し、「書く能力」の根幹となる「論理的思考力」を養う指導の充実を図ることを考えた。生徒にとって取り組んだ経験の多い現代文ではなく、古語(文語)を使った「書くこと」によって、生徒の関心・意欲を更に引き出すことも狙った試みである。

2 指導目標と評価

(1) 身に付けさせたい力(論理的思考に関わる目標)

論理の構造に着目し、文語に親しみながら文章を書く力

(2) 関係する学習指導要領の指導事項

論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。(国語総合B(1)イ)
言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア(ア)〉

(3) 関係する論理的な思考の活動

規則、定義、条件等を理解し適用する。(①理解・適用)

(4) 評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
与えられた条件を満たすように題材や言葉を選び、文章の構成を工夫して擬古文を書こうとしている。	与えられた条件を満たすように題材や言葉を選び、文章の構成を工夫して擬古文を書いている。	古典の言葉と現代の言葉とを比較しながら、語彙や文法を正しく使っている。

(5) 評価方法と評価基準表

ア 評価方法

評価規準を基に「ワークシートⅢ」や「授業中の発言・行動」を評価する。特に「書く能力」については、作成した評価基準表(ループリック)を使用する。

イ 「書く能力」の評価基準表(ループリック)

評価A	評価B	評価C
条件に合う適切な言葉を選び、構成を工夫して、擬古文を書いている。	条件に合う言葉を選び、構成を意識して、擬古文を書いている。	条件に合う言葉を選択していない。または、構成を意識していない。

3 単元の指導計画

(1) 言語活動と教材

言語活動：辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較し、擬古文を書くこと。

教材：「方丈記」「竹取物語」「土佐日記」「徒然草」「源氏物語」「道程」「こころ」

『現代語から古語を引く辞書』（三省堂）

(2) 単元観・教材観

ア 単元観

読み手に伝わりやすい論理の構成や展開を工夫するとともに、辞書を引き適切な表現を考えることができる。これまで身に付けた単語や文法を実際に組み合わせることで知識の定着を図り、擬古文を書く行為によって伝統的な言語文化に親しむ態度も育むことができる。また、生徒同士が意見を出し合って推敲するピア・レスポンスによって、他者を意識した読みやすい文章を書くことができる。

イ 教材観

学習した経験のある有名な文章を使用して、現代語を古文単語に置換する練習を段階的に行い、作文に慣れさせたい。その上で、先人の秀逸な文章を手本として、自分なりの論理構成や表現方法に工夫を凝らすことを促したい。

(3) 指導と評価の計画（配当時間3時間）

次／時間	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	◇評価規準，◆評価方法， *努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次（1時間）	① 古典作品の現代語訳を古文の単語に置換する。 ② 現代語作品を古文の単語に置換する。 ③ 原文と比較する。	① 辞書を使い、古典作品の現代語訳を再び文語にさせる。また、三人程度の班でピア・レスポンスを行わせる。 ② 現代語で書かれた詩と小説を文語にさせる。新たに三人程度の班をつくり、ピア・レスポンスを行わせる。 ③ 作文完成後、模範の擬古文を参照させる。	◇ 古典の言葉と現代の言葉とを比較しながら、意味や文法を正しく使っている。 ◆ 記述の分析（ワークシートⅠ・Ⅱ） * 辞書の引き方を練習させ、単語の適切な選択ができるよう文法を復習させる。
第2次（2時間）	① 個人で書くオリジナルの擬古文の題材を考える。 ② 明快な論理構成を意識しながら、オリジナルの擬古文に取り組む。 ③ 書き上げた擬古文を読み比べる。	① 読み手の興味を引くような身近な出来事を考えさせる。 ② 必要な情報を分類させ、読み手にとって分かりやすい論理展開を工夫させる。 ③ クラス全員の擬古文をランダムに交換させ、さまざまな文章を読むことで、古典に親しみをもたせる。	◇ 与えられた条件を満たすように題材を選、文章の構成を工夫して擬古文を書こうとしている。 ◆ 発言・行動の観察 ◇ 与えられた条件を満たすように題材を選び、文章の構成を工夫して擬古文を書いている。 ◆ 記述の分析（ワークシートⅢ）

			*起承転結，序論・本論・結論，演繹法，帰納法など明快な論理展開を例示する。
--	--	--	---------------------------------------

4 学習活動の実際

(1) 学習に取り組む生徒の姿

擬古文を書くのに当たって、ほとんどの生徒が、自分の使いたい現代語をどの古語に置換すればよいか分からず苦勞していた。ふだん、教科書等に出てくる古語を現代語に置換して現代語訳をつくる場合は、使い慣れている現代語であるため、文脈に当てはまる意味を選択することはそれほど悩まなくともできる。しかし、古語に置換する場合、不慣れで知っている語彙も限られるため、選んだ古語が果たして適当なのか自分で検証することが容易でなく、自信がもてないといった声が多数聞こえてきた。頭の中では現代語で筋道立った文章ができていたとしても、擬古文として表現することは難題なのである。一方で、生徒たちは、四苦八苦しなながら擬古文を書くことを通して、接続詞や助詞のような「つなぐ言葉」が、論理的な文章を書く上で重要になることを体感したようであった。不慣れな活動であるからこそ、得られる成果もあることが分かった。

(2) 「身に付けさせたい力」の実現状況と生徒の回答例

ア ワークシートの数値

(ア) 擬古文一文当たりの字数

生徒の平均は約 17 字であった。最も多かった生徒は約 33 字，少なかった生徒は約 11 字であった。これを有名な古典作品と比較すると，

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子となりたまふべき人なめり」とて手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の軀に預けて養はず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れて養ふ。

『竹取物語』の「かぐや姫誕生」冒頭は 1 文当たりの字数が約 20 字であり，

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、『障ることありてまからで』なども書けるは、『花を見て』と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。

『徒然草』の「花は盛りに」冒頭は 1 文当たりの字数が約 26 字であり，

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

その年の、十二月の、二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかに、ものに書きつく。

ある人、県の四年、五年はてて、例のことども、みなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろ、よく比べつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつののしるうちに、夜ふけぬ。

『土佐日記』の「門出」冒頭は1文当たりの字数が約40字であり、

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましき者におとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、人の誇りをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

『源氏物語』の「桐壺」冒頭は一文当たりの字数が58字である。

よって、生徒の擬古文は一文が短い傾向にあると言える。現代語なら読点を続けて一文を長く書くことは簡単だが、古語については語彙が少ないため続けにくく、また修飾語・被修飾語の距離が遠くなる難しさを避けた結果と思われる。

(イ) 擬古文の書き出し

具体的な日付や「先ごろ」「きぞ」など、「時を表す語」で書き出した生徒は約97パーセントを占めた。特に「今は昔」で書き出した生徒は約48パーセントにものぼった。「いつ、どこで、だれが…」というような5W1Hをワークシートに穴埋めさせたため、そのまま書き出しに「いつ」を入れる生徒が多かったのではないと思われる。

(ウ) 擬古文の時制

過去の時制で擬古文を書いた生徒は100パーセントだった。全員過去の助動詞「けり」を使用していた。これは過去の出来事を思い出して書くのが手軽だったからであろう。

(エ) 会話文の使用

会話文を使用した生徒は約45パーセントであった。評論調よりも物語調で書く方が書きやすく、登場人物のせりふをつくり、物語調に仕立てたと思われる。

(オ) 外来語の使用

外来語を使用した生徒は約38パーセントであった。古語に存在しない言葉を表現するのに、新たな漢字を創作するなどの工夫がほとんど見られなかったのは残念であった。

(カ) 本実践の条件である「係り結び」と「敬語」の使用

必ず使用することとワークシートに記載があったにもかかわらず、両方とも使用した生徒は約55パーセントしかいなかった。「係り結び」のみ使用した生徒は約7パーセント、「敬語」のみ使用した生徒は約10パーセントであった。両方とも使用しなかった生徒は約28パーセントいた。辞書を引き1単語ずつ検討しなくてはならなかったため、不慣れな擬古文を書くことに手いっぱい、条件を失念する生徒が多かったのかもしれない。

イ 生徒の感想

(ア) 「選択に迷った言葉」について

① 辞書を引くと、同じような単語が何個も出てきて、本当に自分の思っている意味でどれが使えるのか悩んだ。また、辞書を引いても該当する語が載っていない場合も多く、特に昔にはなかった現代のものをどう表すか迷った。

- ・ **緊張**→「心配」の意味のものに変えた。しかし現代語訳が「心配がほぐれる」になってしまったので変だと思い、最後まで迷った。
- ・ **きをつむ**→一生懸命になるという意味で使ってよいのかどうか。
- ・ **部活動**→「動く」を調べて書いた。
- ・ **コンサート**→歌手を表す「歌主」を見に行くことというように置き換えた。
- ・ **踊る**→「踊り」という意味の「かなで」をどう変えればいいのか迷った。
- ・ **努力**→「苦勞」という言葉に変えた。
- ・ **帰宅**→「帰りけり」とした。
- ・ **学校**→「文屋」「学窓」などどれを使えばよいか困った。
- ・ **膨らむ**→「ふくむ」と書いてはみたものの「含む」のようで意味が通らない気がした。
- ・ **～ちゃん, ～くん**→自分たちは名前に付けて呼んでいるが昔はちがうから困った。
- ・ **七月** ・ **驚く** ・ **はしゃぐ** ・ **盛り上がる** ・ **岩** ・ **家族**
- ・ **勝つ** ・ **偉い** ・ **便宜** ・ **しばらくして** ・ **爆弾** ・ **世界**

② 名詞や用言の単語が分かっても、助詞を入れるのか入れるにしてもどれにするのか、つなぐ助詞の使い方が難しく、文を書くには重要だと思った。語尾の助動詞にも困った。

- ・ **に** ・ **とか** ・ **で**

③ その他

- ・ 係り結びを入れるにも入れる場所に悩んだ。
- ・ 敬語が入る文の場合、敬意の度合いによってどの一人称を使えばいいのか迷った。
- ・ 時間の表し方に困った。

(イ) 単元全体について

① 古語を現代語に直すのは慣れてきて文脈でなんとなく分かるが、その逆の作業をいざやってみると、ストーリーは頭の中にあっても思った以上に単語がでてこなくて難しかった。ほとんど辞書に頼ってしまったり、同じ単語ばかり思い浮かんでしまったり、自分の語彙の少なさを痛感した。語彙が少なくて表現しにくかった。単語をただ並べるだけでなく、条件や文脈に沿いながらつくらなければいけないのも大変だった。助詞や助動詞をうまく扱えなかったが、文を書く上でいかに重要か分かった。ただ、書くために一生懸命調べたので改めて古文単語や文法の復習になった。新しい古文単語を知ることができた。

② 部活動や夏休みなどの身近な話題を擬古文で読むと新鮮に感じた。現代語訳を読まなくても擬古文から伝えたいことがすごく伝わってきておもしろかった。使い方に自信がなくて入れなかった反語などの表現を、上手に使っている他の人の文を読んで、このような使い方があるのだと勉強になった。おもしろい作品ばかりで表現の仕方がたくさんあり、自分ももっと書いてみたいと思った。

③ その他

- ・ 地の文よりもせりふの方が難しかった。
- ・ 既存のストーリーを訳すこともやってみたいと思った。
- ・ できあがってから係り結びと敬語を入れていないことに気付いてとてもショックだった。
- ・ 擬古文ができていいのか自分でよく分からない。

今回使用した『現代語から古語を引く辞典（三省堂）』には5万語以上の単語が収録されているのだが、例えば小型の国語辞典『新明解国語辞典（三省堂）』でさえ約7万8千語、生徒がよく使用する『広辞苑（岩波書店）』は約24万語、『大辞林（三省堂）』は約23万語も収録されていることからすればずいぶんと少ない。しかし、それよりも一つ一つの単語の理解が不十分によることが大きいと考える。同義語や類義語、派生語まで幅広く理解することができれば、美文でなくとも最低限の単語で相手に伝わりやすい明快な文を書くことはできるのではないだろうか。

5 おわりに

本実践の目指す力の一つに「伝統的な言語文化に親しむ態度」を挙げた。多くの生徒は周りを楽しんでピア・レスポンスを行い、悩みながらも擬古文を書くことを楽しんでいった。古語で書かれた文章を現代語に直すという一方通行的な勉強方法ではなく、その反対を行うことで双方向に伝統的な言語文化に触れるよい機会となった。また、その副産物として文法事項や古文単語の復習に役立った。その後の授業で感じることは、大体の意味を捉えてよしとするのではなく、細部まで納得できる解釈をしたいという向上心が見受けられるようになったことである。

そして、もう一つは「論理的に思考し、適切な言葉を選択する力」であった。慣れない古語であっても、短い文章ながら起承転結があり、意味の通る文章を書くことができていた。思い付いた話が擬古文になるのかという思考・検討、助詞や助動詞の働きの認知、「係り結び」が強調すべき部分に入っているかという検証など、さまざまな構造意識の強化につながった。本実践は、文章を論理的に書こうとする態度の育成に一定の効果があっただろう。

ただ、一貫した主張を表現するには、まだ十分な知識やスキルがない。論理的思考の深化につながるように題材や分量、条件等を変えながら、擬古文を書く経験を積ませていきたい。

「オリジナルの擬古文を書いてみよう」「ワークショップ」

【ステップ1】 古典作品の現代語訳を擬古文にしよう。

例文 鴨長明「方丈記」より

☆断定の助動詞+打消の助動詞

現代語訳 流れゆく河の流れは絶えずして、しかも水は日々異なる。

原文 流れゆく河の流れは絶えずして、しかも水の日は異なる。

難易度★ 「竹取物語」より

☆常用句の活用(3回)

現代語訳 今昔の昔の昔の昔だが、竹取の翁は昔が昔だ。

☆断定の否定名遣い ☆(間接)過去の助動詞

原文 今昔、竹取の翁は昔者あつた。

難易度★ 紀貫之「土佐日記」より

☆伝聞の助動詞 ☆断定の否定名遣い ☆常用句の活用(3回) ☆断定の助動詞

現代語訳 男も書へて日記をつけて、女(の私)も書いてみたりして書いて書いて。

原文 男も書へて日記をつけて、ものを、女も書いてみたりして書いて書いて。

難易度★★★ 兼好「徒然草」より

現代語訳 手持ちの杖はだいたい、田舎、現行の杖より、杖の長さや太さなど、いろいろ異なる。

原文 手持ちの杖はだいたい、田舎、現行の杖より、杖の長さや太さなど、いろいろ異なる。

難易度★★★★ 紫式部「源氏物語」より

現代語訳 どの帝の御代であったか、女御・更衣が大勢お仕えなさっていた中で、それほど高貴な身分ではない方で、たいそう帝に寵愛をうけていびりを受ける方がいた。

原文 どの帝の御代であったか、女御・更衣、あまた、わらびひ、給ひ、けななかに、たいそう帝に寵愛をうけていびりを受ける方がいた。

「オリジナルの擬古文を書いてみよう」「ワークシートⅢ

() (年) (組) (番) 氏名 ()

【ステップ3】オリジナルの擬古文を書いてみよう。

〈A〉最近起きた出来事で印象に残っていることを簡単に書き出そう。

構成メモ

いつ [] 在哪儿 []

誰が [] 何を []

なぜ [] どうした []

〈B〉構成メモを作った後、条件を満たすように擬古文を書いてみよう。

条件①「係の結び」を使う（話の山場、強調したい文に効果的）。

条件②「敬語」を使う（登場人物が複数になるはず）。

※条件をどこに使えるか、ピア・レスポンス中に話し合おうよう。

擬古文 題 []

--

現代語訳

〈C〉他の人の作品と読み比べた後、擬古文を書いた感想を書こう。

(1) 選択に迷った言葉（辞書を引いても複数の単語が候補になった、など）

--

(2) 単元全体

--

「オリジナルの擬古文を書いてみよう」生徒作品例

い【一宮南野球部】

今は昔、愛知の地に師と部員たちありけり。部員たちあいにてミスをするは、師いかる。師曰はく、「いとあさはかな者はたちあいにて使わぬ。」と。部員たち彼一人に曰はく、「JJJJはめ、あいなき者はまたいなり。」と。その部員、一言の後にははたのくくじ、いつれの人もおもわず。

〈7文・132字 「係り結び」○ 「敬語」×

ろ【球技大会】

今は昔、文月に球技大会ありけり。種目はソフトボールなり。師「優勝し給へ」と言ひを聞き、「いかでか優勝せむらむ」と思ふ。試合始まり我打席立つ。我思ふ「いかでか打てむらむ」と。されど我打てず。またクラス敗れたり。我くえこみ、面上がらず。

〈11文・116字 「係り結び」○ 「敬語」○

は【吹奏楽】

夏の文月、稲沢で吹奏楽の大会ありけり。大会間我我あまた練習するけり。本番、皆の前で演奏するに、まことに心が弛む。されど、皆で力を尽くしたりか。我我賞得たり。げにうれしく思はれる。師、皆にのたまふ。「ありがたし。」

〈8文・106字 「係り結び」× 「敬語」○

に【あむ井】

長月の二十日あまり七日の日、あむまといふ店にてテニス部十人で行きけり。みなあゆまけり後ならば、いと空腹なりけり。さればみないと食べけり。カレーライス、サラダ、ソフトクリーム、パンなど。腹ふくれるまで食べ続けたる。ものすま、みないと肥ゆければ、いかがはせむ。

〈6文・128字 「係り結び」× 「敬語」×

ほ【夏休み】

今は昔、みな夏休み過しけり。夏休みといへども、休み、いと少なけり。されども、宿題いと多し。また、部活に務めたり。初め、学びに学舎へ行きけり。

り。これ、夏休みとぞなむいける。中頃かろつじて休みありけり。宿題忘れて遊びだてず。終に、宿題に追われし。我、仏よはじめにひきかえしたまえとぞ願いける。

〈10文・145字 「係り結び」○ 「敬語」○

へ【銀週間】

先頃、銀週間といふものありけり。五日ばかりの間日なり。されどある部活人、これを死週間と呼びけり。この師、いとこころまめしき人なり。師常にのたまふ、「ガッツ。」一日の暇もあらず。いかでか逃げられむ。部活人の身ほろほろなり。やうやう五日果ちたり。これまさに死週間なり。

〈11文・132字 「係り結び」○ 「敬語」○

と【スイカ】

夏みなスイカを食べけり。夏いと暑くつめたきものいとつまい。スイカ黒き種と白き種ありける。白き種いとやわらかし。我白き種がありけるかあやく思ふ。スイカこそ夏の代表ぞと思わぬ。

〈6文・88字 「係り結び」○ 「敬語」×

ち【新人戦】

長月の六日の日、新人戦ありけり。夏のあひだみなきをむ。いとあつかはし日ぞみなこころをつくして戦いける。陸上部におはします小原先生、いとかしくて学生のこころいとおどろおどろき人物なり。

〈4文・92字 「係り結び」○ 「敬語」○

ろ【YDKK物語】

今は昔、わいでいーけーといふものありけり。夏休みに混じりて、勉強をしつつ、よろづの事を成就したり。それは南高祭となむ、いひける。その祭の中に笑顔光る若人たちなむあまたありける。たのみがりて、おそはひてみるに、女装の姿見えたり。名をば智子となむいひける。皆、いみじきわいでいーけーとなり給ふこぼ、ことおか。

〈7文・154字 「係り結び」○ 「敬語」○

ぬ【南高祭】

きのひけは南高祭ありけり。いとよきときなりけり。なかでも、「ほひやかなる舞台に立ちぬる先輩、さうじうへへ。なれど、いじうじかかなるかたちといひみじうなりけり。」

<4文・81字 「係り結び」× 「敬語」×>

る【いざやーじ】

さうじうじき二十日の我横浜へ歌主を見に行きけり。その者らびびこつてなむ言ひける。歌を歌ひをどひたかへをさうじうした。その者すあつきた言ひけり。「我うじ歌ひをさうじう待り。」我それて心を動かさす。

<6文・100字 「係り結び」○ 「敬語」○>

を【先達の話】

昨日、我が剣の道の先達と言ひ語りけり。彼の人、東京の駒沢入学をいじうなむと仰せられけり。我、打ち驚きけり。しかのみならず、「我、先日、おほよそ六刻ほど習ひけり。」となむ仰せられける。我、けに打ち驚きけり。受験生といふ生き物、げにいそし、かつ、げにこそがしき者もなり。

<7文・133字 「係り結び」○ 「敬語」○>

わ【宮城】

九月二十日に嵐がらいびを行ひ給つ。方は宮城なり。我、そこにばすより友と行きけり。宮城涼し。いと自然豊かなり。らいびいとたのし。時忘るるほどめでたきものこそなりけれ。なお、行かしと思ひつむ。

<8文・94字 「係り結び」○ 「敬語」○>

か【歴史的勝利】

今は昔、英国にて闘球の世界大会行われけり。日本、初戦にて南阿弗利加と戦ひけり。日本、この国にぞ勝りける。世の闘球のあつたる人、「これぞ、歴史的勝利なるべし。」と仰す。

<5文・58字 「係り結び」○ 「敬語」○>

や【誕生日サブリイヌ】

今は昔、故人ありけり。故人曰はへ、「まうと我のあれなり。」乃ち我「いざ入おきたらす。」と仰す。これ、いとおどろかせたまふに、故人よりこび聞こめぞ我おもはゆしける。げによからむ。文さし渡すにここはしたるけはいながれけり。「これよきおもひなり。」

<8文・117字 「係り結び」○ 「敬語」○>

た【ドラムせむし】

今は昔、いと便宜で賢いき青色ものからくりなる者おはす。おろかなる男、名をほのび太といふ。いと美しく、優しき娘、しずかと見さすにこれを助けらる。腹にある袋よりあまたのあやしき道具を使ひたまひて、人々ぞ助けたまふ。たごふれば、桃色の戸用すねは遙か遠き田に行きたし所に着かるなり。我それを夏家で見けり。

<6文・148字 「係り結び」○ 「敬語」○>

れ【勉強】

きぞ、我、試験のため習ひけり。問いとひとくたし。師、帳を見つ習へ。「と仰せられけり。我、その通り習ひ、向後なむ心ばむと思ひにけり。なれども試験といふことなむ。勉強に直道なり。」と師加はえて仰せられけり。

<8文・107字 「係り結び」○ 「敬語」○>

そ【吹奏楽】

文月、稲沢にて、吹奏楽コンクールなるもの催されけり。皆憂へけるやうなれど、師の片笑ませ給ひけるに、其れも綻びにけり。金賞賜りけり。この喜びこそ、何事にもかゝ難けり。

<4文・82字 「係り結び」○ 「敬語」○>

つ【元3組男子物語】

竹春の十二日あまと四日の日、いとためし出来事ありけり。林という男いとあつかはし。高島といふ男、「シムンポーイ」ありけり。みなかたがゆへらいながら、ののしる。林、タイに行きけり。みなバックに物をその内に入れ、かへってきこころつかず。

<6文・119字 「係り結び」× 「敬語」×>

ね【南高祭】

今は昔、南高祭ありけり。生徒ども、おのおのそなへ、その日を迎えけり。そのかみ、パネルといふ役ありけり。木村先生も、ねんころに働き給ひて作り終へ、こころもとなきことあれども、事無く終えけり。「これ、皆の芳い報はるわ。」と我思ひけり。

〈6文・116字 「係り結び」〇 「敬語」〇〉

な【結婚】

今は昔、一人の男ありけり。名をば福山雅治と言ひける。世のおまたの女のまこけり。男、いとつれこ。なれど、思ひ交はずいとそなけれ。ひとひ、一人の清らなる女おはしけり。その女、おのれでなく家族の笑顔を願う優しき人なり。男はめで、よばひけり。女、男のまめにうつらなき所にめで、見るこゝと決めたまふ。

〈9文・145字 「係り結び」× 「敬語」〇〉

ら【食べ物と争ひ事】

今は昔、尾張国小島家に女はらからありけり。ある日の申のこと、姉、あへなく腹けば、妹のスーパーカップをへ食らひけり。妹、学校より帰りければ、これに氣ひきけり。いみじきけんかになりけり。

〈4文・91字 「係り結び」× 「敬語」×〉

む【日本】

今は昔、日本といふ国ありけり。日本、アメリカなどと戦いけり。ヒロシマ・ナガサキに原爆落とされけり。人のあまた死にけり。

〈4文・59字 「係り結び」× 「敬語」×〉

う【三】

葉月の十日あまり九日の日、三人の男、自転車で入鹿池の川に行きけり。そこで友、「あのおほきはがねより川に飛び込みたし。」と言えは飛び込みけり。友、いとこきみよこありやまなりけり。その日、いと楽しくけり。

〈5文・99字 「係り結び」× 「敬語」×〉

ぬ【南高祭】

今は昔文屋にて南高祭といふものありけり。生徒みなおのおの楽しい。文化祭にて歌ひ、食らひをぞしける。体育祭にて力を尽くして励みけり。校長曰く「いとめでたしことなり。」とのたまはず。我、いと嬉しけ。

〈7文・97字 「係り結び」〇 「敬語」〇〉

の【自転車】

「自転車」というける駿馬のごとくがしたちまわれる物ありけり。それ、節々氣をははるること必須なりて、ある女、久しく「自転車」に氣をあまたはいりけり。すると、久しかるゆゑ、氣はいれり物ゆへゆへくみ、破裂しけり。「自転車」なるもの、こまめにちくちく氣はるべきことなり。

〈4文・132字 「係り結び」× 「敬語」×〉

お【ロイン失格】

近ごろ小牧「ロナ」にて四人のてこなありけり。四人のてこな映画館にて「ロイン失格」を見けり。一人のてこな「あな、坂口氏とあたらし。坂口氏、あてもあたらしき人ありむや。」とな言ひける。あるてこな「坂口氏逢ひたまへ。」と言ひけり。それを聞き、みなわらひけり。

〈8文・130字 「係り結び」〇 「敬語」〇〉

く【シルバーウィーク】

今は昔、銀週にいと多き練習試合ありけり。相手校名を大同、大谷、名電と申す。よろづの高校ぞいと強きなる。されば、いみじくつかれけり。無事果てぬはしな。

〈5文・77字 「係り結び」〇 「敬語」×〉

や【お母と】

今は昔、いと清けなる有実ありけり。我其れを切りて盤に並びにけり。我其れを食ひにけり。其の味いとつまして。母もまた、其れを食ひければ、「葡萄の味はひなり。」と言ひけり。すなはち家内あはみて笑ひけり。

〈7文・98字 「係り結び」× 「敬語」×〉